わたしが逮捕された日

――パトカーが追ってくる――
後ろから、パトカーが迫ってきて止まるよう合図する。
　　何だろう？

いぶかしく思いながらも、フリーウェーでは止まるのも危ないので、小径に入り停車した。夜中の12時近く、ワシントン州シアトルのダウンタウンの一角。あたりは真っ暗で、わずかに街路灯が鈍く光っている。

当時、わたしはワシントン大学のロースクールの修士課程の学生だった。
９月に新学期が始まって３ヶ月。初めての試験も終わった打ち上げで、日本人仲間と大学街で軽く飲んだ後、ダウンタウンのはずれにある寿司屋に向かっていた。
仲間はわたしの他、日本人学生３人。

わたしはビールを２、３杯ひっかけていたが、この程度では問題ないはず。
そう思いながら車から降りる。警官は男性2名。
　　○×△×○△××……

一人が猛烈な早口でしゃべるが、さっぱり分からない。わたしを外国人だとは夢にも思わないらしい。ガンガン英語でまくしたてる。
　　ちょっと待って、そんなに早くしゃべられては分からない。
　　わたしは日本からの留学生で、ワシントン大学の学生だ。アメリカに来て日がたっていない。そんなに早くしゃべらないで、もっとゆっくり話してくれないか。

わたしがカタコトの英語でゆっくり話すが、彼はそんなことはお構いなし。猛烈なスピードで話す。左手に持った書類を指さしているのは、わたしに署名をしろといっているらしい。

――後手にくい込む手錠――
アメリカでは、いったんサインをしたらあとで言い訳は聞かない。納得せずに気軽にサインしてはダメだ。留学前、そんな助言を先輩から繰り返し聞かされたっけ…。

とにかくあなたのいう話が聞き取れない。もっとゆっくりゆっくり話してくれないか。

わたしがつたない英語でやり取りしていると、助手席からＫが間延びした関西弁で叫ぶ。
矢部さーん。署名したらあかんでぇー。

近くにいるのだから、大声を出さなくても聞こえる。この男、いい奴だが、大柄で、一見悪ヅラである。大声を出せば警官だって警戒する。彼らにすれば、外国語で何か共謀しているかと思うだろう。
それにわれわれ4人とも、超ラフな格好で、身元も人相も怪しいといえば怪しい。

わたしが再び「もう少しゆっくり話してもらわないと…」といいかけた途端、警官はやにわに拳銃を抜き「ホールアップ！」
「エー、これはどうなってるの」と思いつつ、とにかく両手を上げると、後ろ向きに壁に向かうようにいわれ、後手にされ手錠がガチャン。
マサカ！　文明国のアメリカでこれは何なんだ？

―― This is unfair！――
手錠をかけられたままパトカーに移され、そのままどこかに連行されていく。
こりゃーえらいこっちゃー。とにかく領事館に連絡せんとあかんわー。

Ｋのあわてた声がするが、こんな真夜中に領事館に電話したって、通ずるはずはないだろう。何を寝ぼけたことをいってるんだ。
そうは思っても、わたしにもよい知恵がない。唯一の救いは、Ｋがわたしの車を運転しながらパトカーを追跡してくることである。

そういえば、アメリカでは先に”アンフェア”と批判すると先手をとれる、と聞いたことがある。
This is unfair！ This is unfair！（この逮捕は不当だ）。

わたしはひたすら抗議するが、２人の警官は押し黙ったまま。
今後どうなるのかという恐れよりは、「マサカこんなバカなことがあるのか」という思い

が強い。

警官が突然拳銃を抜くことといい、後手に手錠を掛けることといい、クリント・イーストウッドの映画では何度も見たシーンだが、わが身に起こると話は違う。カルチャーショックだった。

とはいえ、「なるほど前で手錠を掛けるよりは、後手で掛ける方が身動きがとれない…」などと変なところで得心していた。
やはりアメリカの法制度を信頼していたのだろうか。それとも、例によって、わたしはいざというときに鈍いせいかもしれない。

――ブタ箱入りを免れる――
連行されたのは、警察の本庁。地下の駐車場からエレベータで上がって、小さな部屋に放り込まれる。さすがにわたしも不安になってきた。妻は寝ているだろうからとりあえず大丈夫だが、明日の朝起きてわたしがいなければ仰天するだろう。妻もわたしも初めての留学だし、新婚間もないのである。

ほどなくくだんの警官が入ってきた。30代の後半で、結構がっちりしている。パトカーの中ではウンともスンともいわなかったのに、意外に紳士的で「オレもワシントン大学の卒業生だ」というので一安心。
わたしはつたない英語で、国際免許証を示しながら抗議する。

(1) わたしは最近シアトルに来たばかりで、あなたの話がよく聞き取れない。それで確認をしたかっただけである。
(2) それなのに、一方的に逮捕するのは、アンフェアである。わたしは日本の弁護士だが、このやり方は適正手続き（due process）に反しないか。
(3) ただし、わたしがもし交通違反をしたなら、認めるつもりだ。

まあこう話をしたつもり。

くだんの警官は、はじめてわたしが外国人であると知ったとみえ、ゆっくりと話し始める。
オマエは、○×アベニューで右折禁止なのに右折した。だから交通違反だ。

それにオマエは無免許だ。

「○×アベニューなどといっても、わたしに記憶がない」というと、今度は道路地図を持ってきて懇々と説明する。なるほどわたしは確かに右折禁止の所を右折したらしい。

その点は分かった。右折禁止違反は認めよう。

だが、無免許だというのはなぜか。わたしは、日本の国際免許証を持っている。

これは、アメリカでも有効なはずだ。だから無免許運転には当たらない。

わたしがこう反論すると、彼は再反論する。

ワシントン州では、国際免許証は認めていない。だからオマエは無免許運転だ。

わたしは更に反論する。

そんなことはない。国際免許証はアメリカと日本の条約に基づいているから、ワシントン州でも有効なはずだ。条約は国内法に優先するはずだ。

この理屈は、今では成り立たないかもしれないが、当時わたしはそう確信していた。わたしがあまりに自信に満ちて主張するものだから、くだんの警官も折れ、無免許運転については不問となった。

そこで、右折禁止違反を認める文書に署名し、かろうじて、ブタ箱入りは免れ、午前１時過ぎにやっと解放された。

――アメリカ社会の「力への信仰」――

翌日には、クラスメートは逮捕劇を知っていた。おしゃべりで愛すべきＫが、まき散らしたに違いない。

解放されたいきさつを話すと、アメリカ人の級友からまず一発脅かされた。

それはラッキーだった。ブタ箱には危険な××男がいっぱいいるんだ。２～３日泊められたら危なかったかも…。

だが、ひどいもんだ。すぐ拳銃を引っこ抜いたり、逮捕するんだから。

アメリカの警察はどうなってるんだ。

そういうと、思いがけない答えが返ってきた。

警官から見れば、それは当たり前さ。真夜中人通りもない所で、４人のアジア人が乗っていて、しかも外国語で大声で叫んだというんだから、警官にすれば不気味だ。

アメリカでは、警官が刺されたり撃たれたりする。押し問答が続けば、隠し持った凶器でやられると思ったのだろう。相手より早く拳銃を抜いて、とりあえずその場を制圧するのは当然さ。

振り返って見ると、事情聴取だけで解放されたのは、単にラッキーだっただけ。
たまたま警官が、ワシントン大学の同窓だったのが幸いした。わたしの話をよく聞いてくれた。他の街だったら、こうはいかなかったろう。

だが、日本では拳銃を抜くことなど考えられない事案で、アメリカの警官はすぐ拳銃を抜き事態の制圧を図る。文明国のアメリカでさえ、日本流の安全感覚は通用しない。
アメリカは荒々しい国で、国民は基本的に力の信奉者である。
その事を学んだ最初の体験だった。この教訓は、後年ビジネス紛争の処理を依頼され、アメリカ企業相手に交渉するときに大いに役立った。